「裁ち目なしきもの」の課題と対処

Problems and solutions for No cutting kimono

岡 寛子
Hiroko Oka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：裁ち目なしのきもの，和裁，SDGs
Key words：No cutting kimono, Japanese sewing, SDGs

１．研究目的

本研究の主題である「裁ち目なしきもの」は，昭和 30 年代に考案された反物から掛け衿分の 14 ㎝だけを裁断し，残り布を折り紙のように折り畳むことで，身ごろ・袖・衽・地衿をつくり出す長着縫製技術である．この技術は，反物の裁断回数を 1 回に抑えているため，縫製部を解くことで再び長い反物に戻すことが可能である．そのため通常の反物を身ごろ 2 枚・袖 2 枚・衽 2 枚・地衿 1 枚・掛け衿 1 枚の計 8 枚の布片に裁断する長着縫製技術に比べて，仕立て直しの幅が広い．このことから, SDGs への貢献や“衣服の廃棄問題”解決の糸口となることが大いに期待できる．そこで，本研究では，現代の衣生活の中でこの「裁ち目なしきもの」の製作技術を用いる際に，どのような課題点が生じるのか考察し，その対処法を模索することを目的とした．

２．研究実施内容

2-1 方法

(1) 12ｍ80 ㎝の反物を用いて身丈 165 ㎝, 袖丈 55 ㎝の「裁ち目なしきもの」を製作し，外見や各部位の寸法を 8 枚の布片から構成される「通常の長着」と比較し, その特徴を捉えた．
(2) 人台に「裁ち目なしきもの」と「通常の長着」を着装後，1 時間安置し，図 1 に示した A～E 点の着崩れ量を計測した．
(3) (1)および(2)の結果から「裁ち目なしきもの」の利点と課題点を考察した．

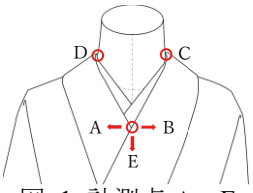

図 1. 計測点 A～E

(4) (3)で明らかとなった利点を活かした上で，課題点を克服する新たな「裁ち目なしきもの」を再構築するために，4 通りの対処法を考案した．
(5) (4)で考案した対処法を製作し，検証を行った．
(6) O 大学家政学部被服学科の学生と卒業生計 122 名にアンケートを実施し，印象評価を行った．

2-2 試料

表地は濱縮緬と結城紬を，胴裏は羽二重を，裏衿は丹後縮緬を，別布には丹後縮緬を使用した．以上の試料布の諸元は，表 1 のとおりである．なお，縫い糸には絹手縫い糸 9 号を使用した．

表 1. 試料布の諸元

	縮緬		紬		胴裏		裏衿		別布	
密度（本/㎝）	経糸	緯糸	経糸	緯糸	経糸	緯糸	経糸	緯糸	経糸	緯糸
	62.8	26.0	31.8	23.3	36.3	32.8	71.8	25.1	57.1	43.7
目付（g/㎡）	148.70		115.51		61.25		131.01		123.49	
布厚（㎜）	0.433		0.395		0.136		0.386		0.340	

2-3 結果と考察

製作の結果,「裁ち目なしきもの」の最大の利点は「裁断回数が少ない」ことであると判明した．課題点としては，外見が通常の長着とは異なること（表 2）, 身八つ口下部～衿つけの身幅（抱き幅）が狭いために衿元が着崩れ易く，着用者の体型が限定されること等, 全部で 8 点の課題点が判明し，その半数が衿の形状に起因するものであった．

そこで，本研究では衿の形状に着目し「外見に違和感を生じない」「身幅を広げる」という点に重きを置き，改良案を 4 種類（❶～❹）考案し，製作・検証した（表 2）．O 大学家政学部被服学科の

在学生・卒業生計 122 名を対象に，製作した対処法❶～❹，および上田氏考案の「裁ち目なしきもの」の外見が，「通常の長着」とどの程度類似しているのか印象評価を行った．調査対象は表 2 の①～⑨の画像とし，調査項目は「非常に似ている（4 点）」「やや似ている（3 点）」「どちらでもない（2 点）」「やや似ていない（1 点）」「まったく似ていない（0 点）」の 5 段階評価とした．その結果，表 3 のような数値が得られた．長着の製作経験の差により数値が異なり，長着の製作経験の浅い人を母集団とした集計結果（b）では上田氏考案の「裁ち目なしきもの」を含めてほとんどの評価対象は「通常の長着」と外見が似ている．つまり，違和感を覚えないという結果となった．また一方で，ある程度の長着製作経験がある人を母集団とした集計結果（c）では，上田氏考案の「裁ち目なしきもの」と対処法❶に対し違和感を覚えるという回答が多く，❷,❸および❹は「通常の長着」と外見が似ている，つまり違和感を覚えないという回答が得られた．

この❷,❸および❹は最初に反物から 14 ㎝ではなく 90 ㎝或いは 45 ㎝裁断することで，裁断した布片から掛け衿だけでなく地衿も製作できる製法である．そのため，身八つ口下部～衿つけの身幅を広く確保できると共に，上田氏考案の「裁ち目なしきもの」と対処法❶には存在しない“剣先”を作り出すことができた．❷,❸および❹には「掛け衿の端が胸下にある」「剣先がある」という共通点があり，長着に慣れ親しんでいる人が長着の外見として違和感がないと認識する必須条件には「掛け衿の端が胸下にある」「剣先がある」の 2 点があることがわかった．また，❷,❸および❹に対して(2)の着装実験を行った結果，いずれも衿元の着崩れ量が減少したことから，上田氏考案の「裁ち目なしきもの」の衿元の着崩れは，身幅の狭さが原因であったと判明した．しかし，❷は 3 回，❹は 4 回裁断するため，上田氏考案の「裁ち目なしきもの」の最大の利点となる「裁断回数が少ない」ということを少々損ねてしまう．そのため，今回提案した対処法❶～❹の中では裁断回数を 2 回に抑え，さらには外見も「通常の長着」に非常に似ている❸が「裁ち目なしきもの」の技術を現代の衣生活において扱う際には最も適していると結論付けた．ただし反物の総丈が 13m に満たないものにおいては，❷・❸は製作することが困難であるので，この限りにおいては❹の方法をとることが現実的であると結論付けた．

表 3. 集計結果

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
a	3.00	2.91	3.57	2.48	3.32	3.73	2.95	3.25	3.44
b	3.19	3.05	3.56	2.58	3.40	3.74	3.05	3.25	3.49
c	2.10	2.24	3.57	2.00	2.95	3.67	2.48	3.29	3.24

a:全体平均
b:日本服飾文化史履修者平均
c:袷長着製作経験者平均

表 2. 上田氏考案「裁ち目なしきもの」
および対処法❶～❹

３．まとめと今後の課題

以上の結果から，上田氏考案の「裁ち目なしきもの」の最大の利点は「裁断回数が少ない」ことが判明した．また，衿元が着崩れ易いことや，掛け衿の長さが胸下に達していないが故に外見に違和感を覚えることもわかった．加えて，対処法❷，❸および❹では，地衿を前身ごろから製作しなかったことで，身八つ口下部～衿つけの寸法と剣先を確保でき，着崩れにくく，外見も違和感のない対処法を提案できた．着装実験とアンケート調査の結果から，裁断回数を抑え，外見も「通常の長着」に非常に似ている❸が，現代の衣生活の中で「裁ち目なしきもの」の技術を扱う際には最も適するが，反物が 13m未満である場合に限り，❹を用いると結論付けた．

また、「裁ち目なしきもの」の技術は常法の長着製作技術に比べて裁断回数が非常に少ないため，裁断行為がハードルとなっている教育現場に採用することが非常に有用であると考えられる．これは阿部氏の先行研究にも記されているが，改めてこのことに言及をすると，この裁断回数が少ないということは，織り糸を抜き取り，その線に沿って裁断を行う和裁特有の裁断方法の手間と時間を省くことができるため，和裁の経験がない人が集まり，尚且つ限られたコマ数の中で製作を行わなければならない教育現場において時短，そして特殊な技術なしで長着を製作することができるという利点があるといえるだろう．シルクスクリーンやインクジェットの技術が進み，反物の柄付けが手作業だけでなく，機械でも行えるようになった現在，この技術を駆使して，あらかじめ反物に折り畳み線を標として印刷しておくだけで簡単に初心者向けの長着製作キットを作ることができるのではないだろうか．さらに，衽と前身ごろの境目は最低 1 ㎝確保できればつまみ縫いをすることができるため，柄付けを工夫すれば付け下げや訪問着などの裾に絵羽模様を入れる必要のあるものでも製作可能であり，さらには通常の訪問着や付け下げのように 2 枚の布地に描かれている絵羽模様を布の釣り合いを見ながら綺麗につなげる「絵羽合わせ」という工程も省くことができるため，この場合でも時間の節約になることに加えて，特殊技術なしで製作することができるという利点が生じる．そこで今後は柄付けや折り畳み線を印刷する位置を研究し，いずれはシルクスクリーンやインクジェットの印刷による大量生産ができれば良いと考えた．さらに，この「裁ち目なしきもの」の技術の普及の方法についても検討していきたい．

４．この助成による発表論文等

学会発表

[1] 岡寛子；裁ち目なしきものの課題と対処，日本繊維製品消費科学会 2023 年年次大会，2023 年 6 月 24 日，オンライン

５．主要参考文献

[1] 阿部栄子；和服製作技術の解明－裁ち目なしの長着－，一般社団法人日本家政学会 第 71 回大会 研究発表要旨集，p.65(2019)
[2] 阿部栄子；和服製作技術の解明－裁ち目なしの長着（その 2）－，一般社団法人日本家政学会 第 72 回大会 研究発表要旨集，p.71(2020)
[3] 上田美枝；新しい仕立方のきもの：はじめて特許を公開する．主婦と生活社，pp.135-143（1963）[4] 岡寛子：裁ち目なしきものの課題と対処，一般社団法人日本繊維製品消費科学会 2023 年年次大会　要旨集，p.53(2023)

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（DB2307）「「裁ち目なしきもの」の課題と対処」を受けたものです．